第40回 事業所訪問

こんにちは健保組合です！

清宮運送有限会社 の巻

世界中を震撼させた米国での同時多発テロへの報復が行われています。

テロなどの被害に遭って亡くなられた方々のご冥福を、心からお祈りいたします。

取材日だった十月三日は、折しも一九九〇年に東西ドイツが統一され、平和の意義を世界中に発信した記念すべき日でもありました。

国境や思想、宗教を超越した本当の平和が世界に訪れることを祈念いたします。

◇ ◇ ◇

「抜けるような青空」という言葉はこの日のためにあるといっても過言ではないほど、一点の曇りもない秋晴れの穏やかな日差しを受けながら、事業所訪問の第四〇回目としてお邪魔したのは千葉市稲毛区に所在する清宮運送有限会社でした。同社は宮野木ジャンクションの側ながらとても閑静な場所に、社長のご自宅と隣接してありました。

私たちが到着し、「こんにちは健保組合です！」とごあいさつすると、庭の池の鯉や盆栽の手入れをされていた清宮社長が「ようこそ」と出迎えてくださいました。あまりにも鯉や盆栽が立派なので、私たちはしばしそれらを観賞させていただきながら、立ち話に花を咲かせてしまいました。

それらの収集は先代社長が始められ、丹誠こめて育てられているうちに数も増えていったそうです。池の錦鯉は品評会で入賞するほど価値があるそうで、私たちの足元を悠々と泳いでいきました。

現在も主に先代が彼ら（鯉）の面倒をみていらっしゃるとのことです。鯉もかぜをひいたりいろいろな病気にもかかったりするそうで、そのたびにわが子のようにいたわる愛情が彼らに伝わり、立派に育まれた成果が人の目を釘づけにすることとなったのでしょう。

清宮社長と奥さま

現状を打破するのは、負担と給付のバランスがとれた社会保障制度

清宮社長は通常、千葉市内の同社の車庫で指揮を執られているそうですが、この日はご多忙のなか、ご自宅で奥さまとともに私たちの取材にお付き合いくださいました。

取材はいつものように健保の情勢報告を簡単にご説明することから始まりました。

組合会議員をされている清宮社長は、近隣企業との接点のなかで、健康保険組合の運営を含めた社会保障のあり方についてよく議論をされるそうです。

経済情勢はますます深刻になり、企業運営にとって社会保険料の負担は大きなウエートを占め、社会保障制度の存在価値についても疑問視されがちです。氏は「負担と給付のバランスが崩壊しつつある現状を打破しなければ、国民は愛想を尽かし制度存続が危ぶまれるのではないか」と危惧されました。

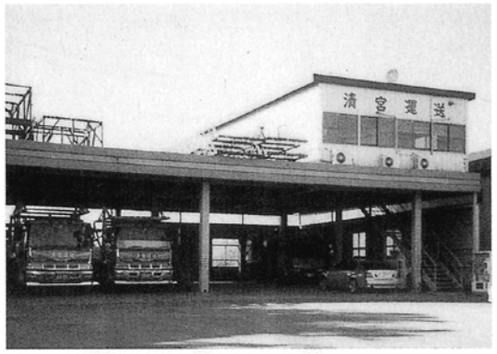
組合会議員の任務は多くの被保険者や家族の意見を代弁することですから、氏に寄せられる意見や不満を受けとめて、事業主の立場、健保の立場の双方それぞれの視点で的確に対応されていることに対し、私たちは感謝申し上げたところでした。

同社だけの運送システムの構築により、三十有余年の歴史を刻む

話題は移行し、同社の歴史や業務内容についてお聞きしました。

同社は、関東一円の工場より主に長尺屋根の運搬から荷揚げまでをトータルに請け負う特殊性のある仕事をされているとのこと。この運搬に関しては、今般、建設技法が大きく変わったことにより、たとえば建物の屋根に関してはある程度仕上がった状態で現場まで運び、必要な箇所まで引き上げて設置する業務だそうです。通常の貨物運送にはない付加価値や時間的制約のあるなかで業務をこなすという特殊技能が要求されるとのことです。

このような業務を遂行するには、ドライバーの資質や認識が高くなければ事故につながることになり、同社ではその点について社員教育を徹底されているようでした。



清宮運送有限会社の遠景

「最初は四トン車からスタートさせ、材料を覚えることから始める」と社長がおっしゃいましたが、しぜんに業務に対する責任感を養えるような教育が行き届いていることを実感しました。こうしたお話から「関東ではこの種の仕事では誰にも負けない」と社長が断言された言葉の裏付けをうかがい知ることができ、社会に対する自らの責任と社員の方々への信頼感から発せられた言葉だと私たちは感じました。

清宮運送は昭和四十四年五月設立とのことで、創業当時はさまざまな業務を経験されたそうですが、わが国の高度成長とともに各企業等の設備投資が進み、建設ラッシュと相まって建設資材の運搬を始められ、特殊性のある業務に対応した同社にしかできない運送システムをみごとに構築されたことが、三十有余年の歴史を刻んでこられた要因のようでした。

こうした順風満帆に思われた企業運営のなかで大きな転機が訪れたのは、平成十年のことでした。

清宮運送は、千葉市内に大規模なターミナル倉庫を構えていた松下電工㈱千葉営業所との取り引きがあり、商品管理を含めた配送を担っておられました。ところが、同グループのリストラの一環として千葉営業所が整理されることとなり、その煽りを受けて平成十年十月には取り引きがなくなったそうです。

清宮社長は、「仕事がなくなったことは確かに厳しかったが、それ以上にその業務に従事していた社員の処遇が大変だった」と振り返られました。仕事に自信をもち、社員を愛する氏にとっては断腸の思いだったに違いありません。

その後、平成十二年には代表取締役に就任されて名実ともに企業を切り盛りされ、同社のもつノウハウを活用しながら、厳しい社会の荒波を上手に乗りきっておられるようです。

豪快な性格の内に秘めた家族や社員への心遣い

私たちが清宮社長に将来の展望についてお聞きすると、「今は現状維持するだけ」とおっしゃられ、「世代が代わったときに次の展開があるのでは」と続けられました。

氏にはご子息が二人おられるとのことですが、「特に引き継ぐための教育は行っていない、本人がやる気になればしぜんと環境は整うのでは」とおっしゃいました。

先代から現社長への世代交代が理想的に行われたように、偉大な父の背中を見て後継者は何かを感じとっていくのかもしれません。

清宮社長は学生時代、いろいろなスポーツを経験してこられたそうです。その経験からか表面上はあまり小さなことにはこだわらない豪快な性格とお見受けしましたが、内にある家族や社員の方々を思う細心の心遣いを兼ね備えた優しさにも触れることができました。また近年は健康のため、お年を召してもできるゴルフを少々たしなんでおられるとのことでした。

取材に同席された奥さまとの呼吸もぴったりで、「おしどり夫婦」ぶりを拝見させていただきながら、今回の取材を終えました。お忙しいなか、ご協力ありがとうございました。

◇ ◇ ◇

秋の形容詞はたくさんありますが、皆さんは「読書」、「芸術」、「行楽」、「味覚」、「実り」……どの言葉がお気に入りでしょうか。

そして、どのようなすてきな秋をご堪能なさったのでしょうか。